

「万葉集東歌」について

久松潜 一

田辺幸雄君の遺著として万葉集東歌が世に出た。この書は東歌研究に新しい方面を開拓した著書であることを読んで感ずるにつけ、学の中に世を去つた君のことが惜しまれてならない。君は大学を出る時も万葉集を卒業論文に書いたが、それから万葉一筋に研究をつづけられて来た。「万葉の地盤」が世に出たのは昭和十三年であつたが、ついで犬養孝君の笠金村と合著で高市黒人を書いて發表した。

戦後、初期万葉に焦点をおいて研究をつづけ、またまつて「初期万葉の世界」として刊行されたのが昭和三十二年であつた。この書によつて君の万葉研究はその真価を認められ、万葉学界にゆるぎなき位置を占めたと云つてよい。それから東歌を研究していると時に君の語るのを聞いたが、「短歌研究」等にその一部が發表された。それがまとまつて書冊となるのを待たずに急逝されたのである。前にも中島光風君や森本健吉君その他前途ある万葉研究家を中道にして失つたが、君もその一人になつてしまつたのは老来いよいよ寂莫の情に堪へない。せめて本書が神田君らの骨折りで世に出たのはうれしいことである。

この書は量は大きくないが、初期万葉の研究と同様に君の万葉研究を不朽ならしめる重要な業績である。この書を読んで注目されると思つた一二の点を挙げると、一は東歌の背景として当時の交通路を委しく調べた上で東歌を考察していることである。一は東國の一

の戸籍の遺存するのを調べて家族構成を調べた上で東歌を扱つてい
る点である。

万葉時代の里もしくは郷の中にも往来する路があるわけであるが里と里とを結ぶ交通路がある。東海道などは江戸と京都とをつなぐ交通路である。そうして交通路も時代がたつに従つて變つてゆく。東海道にしても江戸時代と鎌倉時代とは變つてゐることは指摘されてゐる所であるが、鎌倉時代と万葉時代とでも變つてゐる。殊に海岸に近い交通路は時代がたつにつれ水辺も埋つて来るので、次第にのびてゆく。日本海の海岸の陸地がへつてゆくのと反対である。平安時代の八橋などは随分陸地の方に入つてゐることは何時か歩いて見て知つたことである。こういう点に交通路の研究の困難さがある。田辺君は万葉時代の交通路線の所在を丹念に調べており、時代による相違を指摘してゐる。たとえば「はるかに南方に寄つた別の路線が、万葉時代には東海道の幹線としてより多く利用されてゐたのではなかつたのか」といふ見解の如きはそれであり、坂本博士もといへる。私も承認したい点であるが、それには東海道では海岸線の南への異同という点も理由に考えられる。いづれにしても交通路を精細に調べ、その、時代による變遷といふことは日本交通史の研究として歴史の方ではすでにすぐれた研究もあるのであるが、その方面の研究を東歌研究に導入したことは今まで見なかつた所であり、すぐれた特色と言ひたい。陸路のみならず海路も相當に発達

していたことは伊勢の鳥羽あたりから三河の伊良具や知多の篠島を結ぶ海の交通路が万葉時代、或はそれ以前から多く用いられていることは、東歌のみでなくひろく万葉の歌を見る上にも重要である。上総あたりの海路の状態も東歌の解明に資する所が多いであろう。「東歌時代に最もよく利用された東海道は、平安以後と違つて、相模国府から相模湾沿いに鎌倉に出、走水の海を渡つて、上総から下総へ、東京湾の東側を北に進んだと考えられる」という想定に立つて、

夏麻引く海上瀉の沖つ渚に舫はとどめむき夜

ふけにけり(三三四八)

の歌も海上交通の歌として解釈している。いづれにしても陸上、水上の交通路を明らかにした上で東歌を解明しようとするのは本書の重要な着眼点であり、それによつて解明された点が多い。もとよりそういう着眼点から歌それ自身を解明する場合、もう一步掘り下げたらと思うことは無いではない。問題提起にとどまつた場合もある。戸籍の点では現存する奈良時代の戸籍として最も規模の大きく、比較的欠陥の少ない下総国葛飾郡大嶋郷の戸籍を手掛りとして家族構成や村の組織を明らかにすることは歴史の方でも青木、林、宮本氏等が着手した点である。それをとりあげて田辺氏としての整理を試み大嶋郷の位置を想定し、葛飾の真間のあたりとも、手児奈の歌の背景を明らかにしている。これらもこの書のすぐれた特色として挙げたい点である。

この書の特色はその他多いが、右の二の点を挙げただけでも東歌の研究として独自のものを有することは明らかである。君の万葉集の研究に期待する所多くこの書の価値を高く認めたいのであるが、それだけ君の長逝をさびしく思うのである。

(B 六判、二二六頁、昭和三十八年九月、塙書房)